

原典史料翻訳・解題

シャルル=ニコラ・コシャン(子)「シャルダンの生涯についての試論」(2)

船岡美穂子

前号の『Aspects of problems in Western Art History (東京芸術大学西洋美術史研究室紀要)』(vol. 14, 2016年)では、シャルル=ニコラ・コシャン(子)(1715-1790、以下、コシャン)によるシャルダンの評伝の冒頭部分を(1)として訳出し解題を付した。以下の翻訳は、続く同史料の、シャルダンが王立絵画彫刻アカデミー(以下、王立アカデミー)に入会するまでの部分である¹。註はすべて訳者によるものだが、原典史料にある原註は、訳註の中で都度引用して明示した。文中の訳者による補足は〔 〕内に記した。

【翻訳】

ところで、先取りして、時代を下っておこう。名高いカルル・ヴァン・ローの数歳年長の兄で、父親代わりもつとめたジャン=バティスト・ヴァン・ローの思い出を讃えるために、若い時期のある逸話を忘れるわけにはいかない²。ジャン=バティスト・ヴァン・ロー氏は、ルイ=ミシェル・ヴァン・ロー氏とアメデー・ヴァン・ロー氏の父親にあたる³。彼は、フォンテーヌブロー宮にあるギャラリーの修復の任務を負った。アカデミーの優秀な学生の何人かを連れて行ったのだが、その中にシャルダン氏も数えられたのであった。契約は、日給100スー(その頃の適正な金額)で、ヴァン・ロー氏がそれを学生たちにすべて支払うというものだった。戻る時には、その仕事ぶりと熱意に満足していたヴァン・ロー氏は、おいしい夕食をごちそうして、取り決めの金額の2倍を皆に支払ったのだった。

シャルダン氏がヴァン・ロー氏の寛容な人柄を知ったのは、この時だけではなかった。シャルダン氏は、サロンか、または青年画家展のどちらかに作品を展示した。というのも、私は、その頃の記憶はあまり定かでないからであるし、また、サロンは1737年までは始まっておらず⁴、その類まれな体制よりも前には、最も優れた美術家たちは、ドーフィーヌ広場で絵画を展示していたからである⁵。どちらであったにせよ、シャルダン氏はブロンズの浅浮彫の絵画を展示した。それは、完璧に模倣され、能う限りの良い趣味で描かれていた(fig. 1)⁶。ヴァン・ロー氏は、その絵の価格がいくらなのか尋ねた。シャルダン氏は、あまりにもささやかな金額を答えたが、人からその金額を得るのは無理だと思っていると言った。というのも、好意的に支払ってもらえる幸運に恵まれたことがまだまったくなかったからである。「その絵は私にとっては、あなたの言う値段よりも値打ちがありますよ。」とヴァン・ロー氏は言った。それから、実際に、それ以上の金額を払ってくれた。画家にとって、彼ほどの著名な人物から評価を示されるよりも喜ばしいことがあるだろうか。

シャルダン氏の父親は、息子をどうしても聖ルカ・アカデミーの親方にしたいと望んでいた。堅実な中産階級の市民であった父は、組合の旧会員にして総代でもあり、そもそも美術の事情にまったく通じておらず、専門とする職業の親方として入会しない者は到底社会的身分も得られないと固く信じていた。気の進まない息子に十分な相談をすることもなく、必要な支払いを済ませて親方として入会させたのであった⁷。だからこそ、この聖ルカ・アカデミー組合の画家の親方たちは、自分たちの共同組合の名声を高めたり、王立アカデミーの会員を生み出した教育機関であったことを説得したりしようとして、事あるごとに、必ずシャルダン氏のことを引き合いに出した。とは言え、ずっと以前から、ほとんど彼のこゝしか例に引くことはなかったのだが。



fig. 1 ジャン＝シメオン・シャルダン《山羊と遊ぶ八人の子供たち》1732年、23.5×40 cm、個人蔵



fig. 2 ジャン＝シメオン・シャルダン《食器棚》1728年、194×129cm、パリ、ルーヴル美術館



fig. 3 ジャン＝シメオン・シャルダン《エイ》1725-6年頃、114×146cm、パリ、ルーヴル美術館

シャルダン氏は、聖ルカ・アカデミーに長く留まりはしなかった⁸。多くの美術家たちから賞賛を浴びて勇気づけられ、1728年に王立アカデミーの審査を受けようと計画した。しかしながら、まずは王立アカデミーの主だった役員たちの意見を知っておきたいと考えた。好意的な意向を確かめておくために、ごく許される範囲でささやかな計略をめぐらした。偶然を装って、提出しなければならない数点の作品を最初の部屋に置いておき、自分は2つ目の部屋にいた。優れた画家にして、卓越した色彩画家の一人に数えられ、また、光の効果にかけては最も博識ある理論家でもあったラルジリエール氏が、彼の家を訪れた⁹。シャルダン氏のいる部屋に入る前に、立ち止まって絵画を見た。部屋に入りながら、ラルジリエール氏は言った。「あそこに、とても良い絵を持っていますね。間違いなくフランドルの優れた画家のうちの誰かによるものでしょうね。フランドル派は、色彩がすばらしい流派ですから。さて、ところであなたの作品を見ましょうか。」シャルダン氏は答えたのだった。「もうご覧になったばかりですよ。」「何と、それではさっきの絵は…。」「ええ、そのとおりです。」ラルジリエール氏は、彼を抱擁しながら、言った。「ああ、君、思い切って審査を受けてごらんなさい。」カーズ氏も、ほとんど同じ策略にかかり、自分の弟子からこうして一杯食わされ、最上の賛辞の言葉まで引き出されることになり、いささか傷つけられたように感じた。だが、カーズ氏は、すぐにシャルダ

ン氏を許して強く励まし、紹介を引き受けた。

実際に、シャルダン氏は、全会一致で王立アカデミーの準会員になった¹⁰。その前に、王立アカデミー院長であり国王首席画家であったルイ・ド・ブローニユ氏¹¹が会議に加わった時、シャルダン氏は、ブローニユ氏の前に10点か12点の作品¹²をすべて提示して、その様子を観察し、王立アカデミーがそのうちのいくつかを気に入って目を留めて並べるかどうかを見ていた。ブローニユ氏は言った。「彼はまだ準会員になっていない。それなのに、もう正会員に認められたことについて話している。まったく、君はうまく私に話したね¹³。」確かに、ブローニユ氏はそのとおりのことを快く提案し、王立アカデミーは提示された作品の中から2点の作品を受理した。1点は、果物や銀製食器を積んだ食器棚を描いた作品である (fig. 2)¹⁴。もう1点は、1尾のエイと家庭の道具をいくつか描いた作品で、今なおあらゆる美術家たちの感嘆を集め続けている (fig. 3)¹⁵。実際、シャルダン氏はこれよりも色彩が堂々としていて、これに勝る魔術的効果と技法に富んだ作品を制作したことは一度もなかったのである。

【解題】

前回の翻訳と解題では、修業時代に王立アカデミーで学ぶ機会に恵まれず、経済的にもやや不遇であったシャルダンが、静物のモチーフを描く機会を得て、静物画家の道へ進むことになったところまでを扱った。続く箇所では、いよいよ1728年に王立アカデミーへの入会に至るまでの経緯と逸話が述べられている。

静物画制作において、卓越した才能を発揮して成果を得たシャルダンは、依然として経済的には苦勞したようであった。だが、徐々に王立アカデミーの有力な画家たちから目をかけられるようになってゆく。コシャンは、ジャン＝バティスト・ヴァン・ローが請け負った、フォンテーヌブロー宮のフランソワ1世のギャラリーの修復の仕事が行われた具体的な年代を示していない。だが、別の記録によれば、ヴァン・ローが1731年に同ギャラリーにあるフランチェスコ・プリマティッチョとロッソ・フィオレンティーノによるフレスコ画の修復を任せ、11989リールが支払われたことが判明している¹⁶。また実際に「シャルダン氏がそこ〔フランソワ1世のギャラリー〕で何らかの仕事をした」という証言も残る¹⁷。シャルダンがどの部分をどのように担当したのかは明らかでないが、いずれにしても、フォンテーヌブロー宮は、ルイ15世が結婚式を挙げ、その後も毎年のように訪れており、改築や改装もなされるなど、18世紀を通じて重要な宮殿であり続けた¹⁸。若いシャルダンにとって間違いなく誉れ高く刺激的な仕事であったことだろう。

次に、コシャンが述べた青年画家展とは、その起源は定かではないが、毎年の聖体祝日にパリのシテ島のドーフィヌ広場で開催された展覧会のことを指し、サロン展の再開以降になってこの名称で呼ばれるようになった。当時は、王立アカデミーの会員の如何を問わず、若手の画家や女性画家も参加でき、美術愛好家や蒐集家も古美術品を出品するなど、比較的自由な美術品の売買も可能であった。美術家たちにとっては、1737年からサロン展が定期的で開催されるようになるまでの期間、作品の発表と販売の重要な機会となった。シャルダンもまた、王立アカデミー会員となった1728年から1737年までの間に少なくとも3回出展しており¹⁹、その時の展示記録が根拠となって、本文で語られたブロンズの浅浮彫を描いた作品をヴァン・ローが購入したのは1732年のことであったことが判明している。現存するシャルダンによる作例として、同じフランソワ・デュケノワによる彫刻作品《子供たちのバッカナーレ》を石膏で複製した浅浮彫を描いたものが参考作品として挙げられてきた (fig. 1)²⁰。シャルダンの作品は、同時代の画家や彫刻家たちが購入しコレクションに収めていたことで知られるが²¹、これはそうした最初期の一例と言えるだろう。

若い時期の評伝でとりわけ目を引くのは、王立アカデミー入会に至るまでの逸話に彩られた経緯であろう。その前に、シャルダンは既に1724年には父親の強い勧めで聖ルカ・アカデミーに入会していたが、やがて1729年には退会することになる。聖ルカ・アカデミーは、中世に遡る画家・彫刻家の同業者組合に起源を持つ。対して、17世紀に設立された王立アカデミーは、その聖ルカ・アカデミーからの脱却を目指すものであった。コシャンが述べる通り、18世紀当時、画家として活躍を望むならば、王立アカデミーへの入会が必要だったのである²²。そこでシャルダンは、王立アカデミーによる審査の日よりも前に、委員たちの反応をうかがうために一計を案じ、フランドルの絵画伝統の素養のあるラルヰリエールに、自作をフランドルの画家の作品と見紛わせたという。筆者のこれまでの調査によれば、従来の王立アカデミーの入会作には《エイ》(fig. 3)のように魚、それも腹を割いたものを中心に据えた静物画の前例はなかった²³。この作品は、18世紀当時ばかりでなく、現在に至るまで《食器棚》(fig. 2)よりも知名度が高く、画家の代表作とされている。「すべての美術家たちの感嘆を集めた」というコシャンの言葉も誇張ではないだろう。というのも、この評伝の執筆された時期に比較的近く、制作から約40年を経た後の1763年のサロン評でも、デイドロが本作を高く評価したほどであり、名声がうかがわれるためである²⁴。

一方、マリエットによる評伝ではこうした入会にまつわる逸話は紹介されていない。だが、シャルダンの死後に出た死亡記事のほうでは、審査の約3か月前の6月3日に、青年画家展に《エイ》を含む複数の作品を展示したこと、そこを偶然訪れた王立アカデミー会員や美術愛好家たちに見込まれて入会を勧められたという、別の類似した逸話が紹介されている²⁵。これらのシャルダンをめぐる入会の逸話が示す「意味」について言えば、クロウが示唆したように、古代以来の芸術家伝説に類縁を見出すこともできよう²⁶。例えば、通行人から見えないところに作者アペレスが隠れて、展示した自作の評価に聴き耳を立てたという、プリニウスによって伝えられたエピソードからの影響が認められるだろう。

以上の記述からは、王立アカデミーの重要な画家たちから見出され、厚意を受けることになるシャルダンの優れた才能ばかりではなく、自分を過小評価する慎ましさと謙虚さ、また作品価格を実際よりも低く見積もってしまう無欲さといった人柄が、具体的かつ好意的に語られている。マリエットによるシャルダンにかんする記述においても、本人は自分の才能が王立アカデミー会員となるには値しないと考えていたが、友人たちから入会を勧められて異例の即日入会を見事に果たしたこと、そして《エイ》への言及といった点では共通する²⁷。だが、シャルダンの画歴および入会作品を雄弁に彩るラルヰリエールとの逸話はなく、その人物像や人柄にかんする記述も見られない。そのことは、シャルダンとマリエットの間に親交がなかったこととも当然関係しているに違いない。そして、コシャンの執筆した評伝は、そもそもルーアン科学文芸芸術アカデミーで朗読されるためのものであったことから、その聴衆に向けて、シャルダンの人柄や王立アカデミーの主だった画家たちの追憶を語ることもまた大きな価値を持ったと推測されるのである。

* 付記：本稿は、平成27-29(2015-2017)年度科学研究費補助金・特別研究員奨励費(研究課題番号15140035)による研究成果の一部です。

註

1 翻訳にあたり、前号と同様に以下を底本とした。COCHIN, Charles-Nicolas, « Essai sur la vie de Chardin (1780) », dans ; BEAUREPAIRE, Charles de (publié par), *Précis analytique des travaux de l'Académie des Sciences, Belles-Lettres et Arts de Rouen*, t. LXXVIII, 1875-1876 [以下、BEAREPAIRE], pp. 417-441. また、以下の基礎文献中にも当該史料が収録されており、合わせて参照した。PASCAL, André et GAUCHERON, Roger, *Documents sur la vie et l'œuvre de Chardin*, Paris, 1931,

- pp. 1-26; WILDENSTEIN, Georges, *Chardin*, Paris, 1933, pp. 34-47.
- 2 カルル・ヴァン・ロー (Carles Van Loo, 1705-1765) は、フランスで成功を取ったオランダ出身の画家一族の家系に生まれ、一族を代表する物語画家の一人。1750年代以降、大様式による作品で名声を博した。ジャン=バティスト・ヴァン・ロー(Jean-Baptiste Van Loo, 1684-1745) は、カルルの兄で、コシヤンの記述にもあるようにその師でもあった画家。
 - 3 ルイ=ミシェル・ヴァン・ロー (Louis-Michel Van Loo, 1707-1771) は、コシヤンが述べておと、ジャン=バティストの息子で、1725年にローマ賞を獲得した物語画家。シャルル=アメデー=フィリップ・ヴァン・ロー (Charles-Amédée-Philippe Van Loo, 1719-1795) は、父ジャン=バティストに絵画の手ほどきを受けて物語画と肖像画を制作した。1738年にはローマ賞を獲得した。
 - 4 ウィルデンスタインによる註は以下。「これは、『再開されておらず』とすべきである。1737年にサロンは『規則的な開催を取り戻した』。続く資料Eの註2を見よ。WILDENSTEIN, *op. cit.*, p. 37. 指示された参照箇所は以下。Ibid., p. 40. この指摘のとおり、サロンは1725年の開催後の中断を経てから、1737年に再び規則的に開催された。
 - 5 毎年、聖体祝日にシテ島のドーフィエ広場で開かれていた屋外での展覧会。詳細は、本論解題を参照。
 - 6 解題で後述する通り、サロンではなく、1732年の青年画家展に出展されたことが、『メルキュール・ド・フランス』の記事から判明している。当該作品に関連して、先行研究では、fig. 1に挙げたものが参考作例とされている。《山羊と遊ぶ八人の子供たち》(1732年、23.5×40 cm、カンヴァス、油彩、個人蔵)。ROSENBERG, Pierre, TEMPERINI, Renaud, *Chardin*, Paris, 1999, pp. 188-290 [以下, CAT. R. と略], n° 59.
 - 7 1724年2月3日のことであった。Cat. exp., *Chardin 1699-1779*, cat. par ROSENBERG, Pierre, etc., Paris, Galeries nationales du Grand Palais, 1979 [以下 Cat. exp. 1979 と略], p. 382.
 - 8 1728年に王立アカデミーの会員になった後、1729年2月5日に聖ルカ・アカデミーの親方の地位を放棄した。Ibid.
 - 9 ニコラ・ド・ラルジリエール (Nicolas de Largillière, 1656-1746) は、アントウェルペンで修業した肖像画家で、物語画も手がけた。フランドルの絵画伝統を受け継いだ画風で知られ、ウードリーの師でもあった。1738年から42年にかけて、王立アカデミーの院長を務めた。
 - 10 1728年9月25日のことであった。Procès-verbaux de l'Académie Royale de Peinture et de Sculpture, publié par A. de Montaignon, *Années 1648-1789*, Paris, 1883, t. V, pp. 47-48.
 - 11 ルイ・ド・ブローニュ (Louis de Boullogne, 1654-1733) は、ローマで修業し、ラファエロやボローニャ派に影響を受けた物語画家。アカデミーの伝統に根ざした画風を特徴とする。コシヤンの記述にもある通り、既に1722年には王立アカデミーの院長、1725年には国王首席画家になっていた。
 - 12 後述の入会提出作品2点以外の、10点ほどあったとされる作品については、詳細な記録がなく、同定されていない。
 - 13 コシヤンによる原註は以下。「ダンタン公と同じように、ブローニュ氏は、誰に対しても君僕で話す[チュトワイエ]悪い癖があった。」
 - 14 《食器棚》(1728年、194×129cm、カンヴァス、油彩、バリ、ルーヴル美術館)。CAT. R., *op. cit.*, n° 34.
 - 15 《エイ》(1724年頃、114×146cm、カンヴァス、油彩、バリ、ルーヴル美術館) CAT. R., *op. cit.*, n° 13.
 - 16 ENGERAND, Fernand (rédigé et publié par), *Inventaires des collections de la couronne. Inventaire des tableaux commandés et achetés par la direction des bâtiments du roi (1709-1792)*, Paris, 1900, p. 469, note 3.
 - 17 DANDRÉ-BARDON, Michel François, *Vie de Carle Vanloo*, Paris, 1765, p. 12.
 - 18 近年の研究では、18世紀のルイ15世の治世時代におけるフォンテーヌブロー宮の果たした役割が注目されている。Cat. exp. *Louis XV à Fontainebleau; la « Demeure des rois » au temps des lumières*, Château de Fontainebleau, 2016.
 - 19 Cat. exp. 1979 PARIS, *op. cit.*, pp. 382-383. 同展については以下参照。CROW, Thomas Eugene, *Painters and Public Life in Eighteenth-century Paris*, New Haven and London, 1985, pp. 79-103; BERGER, Robert W., *Public Access to Art in Paris: a Documentary History from the Middle Ages to 1800*, University Park, Pa, 1999, pp. 149-156.
 - 20 展示記録は以下。Mercure de France, juillet 1732, p. 1611. その後、息子のルイ=ミシェルが相続してから死後の競売に記録が残る。Catalogue des tableaux du cabinet de feu M. Louis-Michel Vanloo..., 14 décembre 1772, n° 80. 作品データは、註6参照。フランソワ・デュケノワ (François Du Quesnoy, 1597-1643) は、フランドル出身で、ニコラ・プッサンとも親しく、ローマで活躍した彫刻家。古典主義的な作風を示し、ここに挙げた浅浮雕のように幼児を主題とした作品は、フランスやオランダでブロンズや石膏で数多く複製されて、絵画にも描かれた。彫刻のオリジナル作品は、《子供たちのバッカナール》(1626年、大理石、62.5×87.5cm、ローマ、ドーリア・パンフィーリ美術館)。
 - 21 以下で分析された。ROLAND MICHEL, Marianne, « Sur quelques collections d'artistes au XVIII^e siècle », dans ; MICHEL, Patric, et al., *Collections et marché de l'art en France au XVIII^e siècle*, Bordeaux, 2002, pp. 143-151.
 - 22 聖ルカ・アカデミーと王立アカデミーの成立と歴史、及び対立関係は、以下を参照。GUIFFREY, Jules-Joseph, « Histoire de l'Académie de Saint-Luc », *Archives de l'Art français*, Nouvelle période, t. IX, 1915, repr. Paris, 1970; ニコラス・ベヴスナー著 / 中森義宗・内藤秀雄訳、『美術アカデミーの歴史』、中央大学出版会、1974、83-112頁; 栗田秀法、『王立絵画彫刻アカデミーその制度と歴史』、『西洋美術研究 美術アカデミー』、no.2、1999年、53-71頁。
 - 23 拙稿、「シャルダンの王立絵画彫刻アカデミー入会について」、『Aspects of Problems in Western Art History: Essays Presented to Nobutoshi Fukube (東京芸術大学西洋美術史研究室紀要) : 福部信敏先生退任記念論文集』、vol. 6、2005年、77-83頁。
 - 24 DIDEROT, Denis, « Salon de 1763 », dans ; *Essais sur la peinture ; Salons de 1759, 1761, 1763 / Diderot*, textes établis et

- présentés par MAY, Gita, CHOUILLET, Jacques, Paris, 1984, p. 220.
- 25 « Nécrologe des artistes et des curieux par une société de gens de lettres : Chardin, peintre », *Revue universelle des arts*, publié par M. Paul Lacroix (bibliophile Jacob) et M. C. Marsuzi de Aguirre, t. XIII, 1861, pp. 45-48, dans ; WILDENSTEIN, *op. cit.*, p. 46.
- 26 CROW, *op. cit.*, pp. 134-136; 拙稿、前掲書。
- 27 MARIETTE, Pierre-Jean, « Chardin », *Abecedario*, 1749, Publié par Philippe de Chennevières et Anatole de Montaiglon, *Archives de l'art français*, 1853-62, pp. 426-434 ; 拙稿、「原典資料翻訳 ピエール=ジャン・マリエット『P.-J. マリエットのアベチエダリオ』より「シャルダン(ジャン=バティスト=シメオン)」」、『Aspects of Problems in Western Art History(東京芸術大学西洋美術史研究室紀要)』、vol. 7、2006年、47-55頁。

[図版出典]

Cat. exp., *The Age of Watteau, Chardin, and Fragonard*, New Haven and London, 2003. (fig. 1) / Cat. exp., *Chardin*, Paris, Galeries nationales du Grand Palais, 1999. (figs. 2-3)